えどまえ　うみ　まなわ
江戸前の海　学びの環づくり
瓦版　第３号

江戸前ESD協議会　〒108-8477　東京都港区港南4-5-7　東京海洋大学海洋科学部

江戸前の海でうまれる「出会い」
ー大森ふるさとの浜辺での活動からー

小山　文大（ＮＰＯ法人地域パートナーシップ支援センター　副理事長）

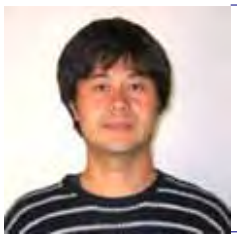
東京都大田区大森の周辺は、かつて遠浅の海が続き海水浴や潮干狩りを楽しむ人たちでにぎわい、海苔の養殖が盛んに行なわれていました。そのような地域に2007年4月、大森ふるさとの浜辺公園がオープンしました。公園内には入り江、磯場、砂浜、干潟があり、気軽に海に親しめるようになっています。それ以前は長い間工場地帯になっていたために海に近づくことができませんでしたが、実際に海にふれることもできるようになりました。休日には親子連れからお年寄りまでたくさんの人々が訪れ、とてもにぎわっています。

公園近くの小学校から、このような環境を活かして何か学習ができないだろうかという相談がありました。先生と話し合った結果、興味のある生き物を子どもたち自身で調べることになりました。近くに住んでいても海で遊んだ経験がほとんどない子どもたちは、失敗をしながらも工夫をすることで、少しずつ魚や貝やカニ、クラゲをつかまえられるようになっていきました。使う道具もどんどん変化していきました。このような子どもたちの試行錯誤を東京海洋大学の学生たちがサポートしてくれました。さらには、浜で定期的に魚類調査をしていた学生グループの協力で、投網も体験することができました。

これまでの一連の学習を振り返ると、子どもたちにはふたつの貴重な「出会い」があったように思います。ひとつめは、浜辺やそこに住む生き物たちという海（自然）との出会いです。おっかなびっくりつかまえたカニ、やっとのことで魚をつかまえたときの喜び、海には水が多いときと少ないときがあることなど、これまでは近くて遠かった浜の自然に子どもたちは身をもって出会ったのではないでしょうか。

もうひとつは、人との出会いです。学習をサポートしてくれた大学生。魚やエビの捕り方を教えてくれたおじさん。黙々とゴミを拾っていたおじいさん。浜での学習が思いがけず多くの人々との出会いを生み、学びを豊かにしていきました。

江戸前ＥＳＤが目指す持続可能な江戸前の海を考えるときに、人・地域・海の良好な関係は不可欠です。これらの良い関係を築いていくためのはじめの一歩となるたくさんの出会いが、大森ふるさとの浜辺で生まれています。それは子どもたちだけではなく、関わる大人たちにとっても同様です。たくさんの出会いを生み出す活動をこの場所で続けていくとともに、他所にも広げていきたいと考えています。



小山　文大（こやま･ふみひろ）

環境カウンセラー。様々な環境活動をとおして地域での良好な関係（パートナーシップ）づくりを目指しています。具体的には、小学校の環境学習コーディネート、企業や行政との協働による環境イベント、多摩川河口干潟・東京都の雑木林の保全活動などを行なっています。もともとは森林インストラクターでもあるのですが、最近はすっかり東京湾・海にはまっています。

ＥＳＤは持続可能な発展のための教育（Education for Sustainable Development）の略です。

江戸前ESDニュース

10月2日に大森東小学校で（東京都大田区立）で第1回江戸前ＥＳＤカフェが開催されました

辰巳　ちあき　江戸前ESD事務局

去る10月2日、第1回江戸前ＥＳＤカフェが大田区立大森東小学校で6年生を対象に、開催されました。

大森東小学校の目の前にある「大森ふるさとの浜辺公園（以後、ふるはま）」の海水を汲み、その中にどんな生き物がいるかを顕微鏡で見て、生き物を通して私たちの生活と海とのつながりを考えよう、という趣旨です。

江戸前ＥＳＤからは、海洋生態系の基盤である植物プランクトンが専門の堀本奈穂さん（海洋大・海洋環境学科・助教）を中心に、支援スタッフとして学生、教員、また、小山文大さん（表紙参照）、藤塚悦司さん（インタビュー記事参照）も参加しました。

9月初めから、堀本さん、大森東小学校の先生方、小山さんらは打ち合わせを重ね、その後、東京海洋大学にて堀本さんが江戸前ＥＳＤリーダー研修会を開き、研修生の学生たちと当日の授業内容を検討し、授業で見せる顕微鏡のスライドを作成しました。

前日の10月１日には、顕微鏡やろ過ネットの使用方法を実際に用いて、当日の授業の進め方や子供たちへの指導法についても確認、大学の公用車（トラック）にカフェで用いる道具を積み込み、準備万端整えました。

2日カフェ当日は、小雨が降る天気でした。朝8時過ぎにトラックで大学を出発、大森東小学校に到着、いったい何が始まるのかと子供たちが興味津々見守る中、準備にかかりました。

いよいよ、9時に授業開始、まず多目的教室にて、6年生全員にパワーポイントを使った事前授業を40分行いました。内容は、東京湾がどんなところか、大森付近の今昔くらべ、湾岸の埋め立てが進み、流域人口が増えたことによる有機汚濁の進行、生き物の変遷、プランクトンとは何か、などなど。子供たちだけでなく、小学校の先生たちも真剣に耳を傾けておられました。

☆　第1回　江戸前ＥＳＤカフェ　☆

おもしろ理科教室～海とつながる私たちの生活

実施日：2007年10月2日（火）
実施場所：大森東小学校内および「大森ふるさとの浜辺公園」（ふるはま）
参加者：大森東小学校　6年生全員（2クラス）、校長先生、6年クラス担任のお二人の先生

江戸前ＥＳＤカフェ頭（講師）
　堀本　奈穂（東京海洋大学・海洋環境学科・助教）
江戸前ＥＳＤリーダー研修生　(東京海洋大生)
　川田祐紀子（院・海洋環境保全学専攻）
　川村真理、遠矢亮、和久井遥（海洋環境学科4年）
　吉良亮一、小林真理、日野佑里（海洋政策文化学科4年）
江戸前ＥＳＤスタッフ
　小山文大（NPO法人地域パートナーシップ支援センター）
　藤塚悦司（大田区立郷土博物館）
　池田玲子（東京海洋大学・海洋政策文化学科・教授）
　柳　優香（海洋政策文化学科4年）
　辰巳ちあき（江戸前ESD事務局）（以上、敬称略）

左上：堀本さんがろ過ネットの使用法を学生に指導（海洋大でのリーダー研修会にて）、右上：事前授業の様子（大森東小学校にて）、左下：バケツに水を汲む、右下：ろ過ネットを使って観察用の海水をボトルに詰める（ふるまはにて）

その後、小学校から子供たちの足で10分ほどのふるはまへ移動、水を汲んだり、ネットでろ過したり、楽しいサンプリングを行いました。天気の悪いのなんて関係ない、とばかりに、子供たちは大はしゃぎ、最初は遠巻きに見ていた近所の方々も、「何をしているの？」と、たずねてこられました。

小学校に戻ってからは、11時から1組が、引き続き11時50分から2組が、理科実験室にて授業を40分行いました。子供たちは、顕微鏡の使い方、スライドの用意の仕方を教えてもらいながら、自分たちで汲んできた水を観察しました。小学校の備品と大学から持参した顕微鏡を子供1～2名が1台ずつ使い、4～5名のグループを海洋大生1名が担当しました。

あいにくの前日からの雨のため、あまり多くのプランクトンが観察できず、事前に用意して大学から持ってきたサンプルを見るグループもありました。それでも、「見えた、見えた、」とはしゃいだり、丁寧にスケッチしたり、図鑑とにらめっこしたり、と三者三様の子供たちの反応を見て、大学と地域の小学校の交流の実現と第1回江戸前ＥＳＤカフェの成功を感じました。

小学校の先生方からは、「1人でクラス全員を見ているので目が届かず、学校に備えてある全部の顕微鏡を、一度に使ったのは初めて。1人1人が、こんなにゆっくりと顕微鏡を見る機会もなかった。また、どんな物を観察させたらよいかも、良く分からなかった。子供たちだけでなく、教員たちも勉強になった。」とのご感想をいただきました。

最後に採取した生物をプロジェクターに投影して解説する予定でしたが、練習どおりに上手くいかなかったことだけが心残りです。が、とても充実した授業だったと思います。

終了後、校長先生のご厚意により、給食をご馳走して頂きました。この日の献立は、秋野菜のシチューと揚げパン、梨、とても懐かしく頂きました。（たつみ・ちあき）

【堀本奈穂さんのふりかえりから】

対象が小学6年生ということで、当初はどうなることかと思いましたが、私たちを素直に受け入れてくれたので、よかったと思います。当日は、担任の先生方の日々のご苦労を垣間見る場面が多々あったように記憶しています。

実施に際しては、前後に雨が続き、おおむね予想していたとおりの状況でした。あらかじめ大学で用意したサンプルと顕微鏡を持参したものの、小学校の顕微鏡では光量不足で十分に観察できなかったり、生物があまり見られなかったりしました。

それでも、江戸前ＥＳＤスタッフの皆さんからサポートいただき、児童のみなさんも感謝していたと思います。

（堀本さんは1月現在、南極調査航海中です。（編集部））

INTERVIEW

地域を元気にする海苔の資料館を

―藤塚悦司さんに聞く―

高度経済成長期の昭和38年春まで、東京都大田区沿岸は海苔の一大生産地でした。当時の海苔生産の様子を語る資料が、2008年4月に開館予定の「大森海苔のふるさと館」で常設展示されます。場所は、2007年4月に開園した人工海浜公園「大森ふるさとの浜辺公園」の隣です。

昨年12月12日、資料館の設立準備に関わってこられた藤塚悦司さんを大田区立郷土博物館に訪ね、お話を伺いました。（日野佑里）

２００７年１２月１２日、大田区立郷土博物館（大田区南馬込）の藤塚さんの部屋でお話を伺う日野さん。

大田区立郷土博物館から「海苔のふるさと館」へ

日野　いつから海苔漁業史に関わってこられたのですか。

藤塚　大田区立郷土博物館は昭和54年10月に開館したのですが、昭和53年4月に設立準備室に職を得てからです。海苔を食べるのは好きでしたけれど、海苔の歴史はここへ来て初めて知ったんです。博物館の基本展示の中に海苔を入れることが必要なのは、仕事を始めてすぐに分かりました。「大森海苔資材保存会」が区へ寄贈した資料約300点をこの博物館の基本展示にするということになりました。

日野　海苔資材保存会とはどういう方たちですか。

藤塚　東京都内湾では昭和37年に漁業放棄して、昭和38年春で海苔生産をやめています。大田区には約2000軒、東京都全体のほぼ半分のノリ養殖漁業者がいて、その道具に使い道がなくなったわけです。船は、内湾向きのものだから千葉県側に売られたりしたと聞いています。道具は海苔生産を続けているところに譲られましたが、古いものは捨てられて朽ちていく。

一方、漁業者にしてみれば、埋め立てる、航路をつくる、海が汚くなるという状況下で急にやめたので、ノリに対する「想い」が残ってしまった。当時は個人がカメラを持ちだした時代で、写真を撮った人もいました。漁業者自身が、公文書館や大学図書館などに行って、古い文書を読むことから始め、漁業史を勉強をして『大森漁業史』という本もまとめています。大森第一小学校はノリ生産者の子弟がほとんどで、昭和30年頃に生産の様子を16㎜フィルムに撮影した先生もいました。地元の人たちが自分たちでつくったこういう資料は、地域の宝なんです。

大森ふるさとの浜辺公園（大田区ホームページから）

日野　そういう想いが「海苔のふるさと館」へつながっていくのですね。

藤塚　大田区に大森貝塚や遺跡があることを含め、こういう資料が大田区立郷土博物館をつくる原動力となり、今度は海苔の資料館をつくろうという流れに結びついていきました。

ふるはまで活動する人たちとの出会い

日野　今年４月に開園した「大森ふるさとの浜辺公園（以降、ふるはま）」は近所の人たちにとても人気があるようですね。

藤塚　ふるはまについては、平成14年度に区民と行政が浜辺の利用や将来の維持管理について話し合いながら利用計画をつくり上げる場として「大森ふるさとの浜辺公園を考える会」、平成15年度からは「大森ふるさとの浜辺公園をつくる会」（以降、つくる会）を設置しました。

つくる会は、地元の構成員23名、これは町会・自治会から最低1人は出て、また、海辺なので自然保護団体の方々が9名、あとは区報で一般募集をして参加された方々です。区職員は、この中のグループにオブザーバーで入っていますが、基本的にワークショップは、参加者の話し合う場でした。

つくる会は平成18年度で終わったのですが、このワークショップの成果を資料館にも取り入れていこうと考えています。

日野　ふるはまに関わるようになったのは、資料館のプログラムを考えるためですか。

藤塚　海苔の資料館をつくるって言っても、やはり、浜との関係性を持たせないともったいないということで、ふるはまに関わり出しました。

日野　ふるはまでの活動に参加して、どのように感じられましたか。

藤塚　すごいなと思いましたね。生き物もすごいし、人もすごい。東京湾にありえないような、きれいな渚をつくったのもすごいけど、その浜に生き物があんなにいるんだなあと、命のたくましさを感じました。それから、こういう場を望んでる人がどれだけいるかということも。近所のおじさんたちが、人知れず、羽田や運河から貝を採って撒いてみたりしている。その貝たちは砂が硬くて潜り込めなくて、砂の上に立ったままになってたり。自然と人間との関係って面白いって思いましたね。

投網に何がかかったかな？ーふるはまにて

海苔のふるさと館は資料館でビジターセンター

日野　「海苔のふるさと館」の機能と活動イメージを教えてください。

藤塚　構想の大枠を去年の４～５月くらいから考え始めました。まず、海苔生産の歴史を伝える文化財の保存・展示・活用施設とする。それと、浜辺の環境や立地をよく理解していただくためのビジターセンターとしての機能もほしい。

海苔という枠組みがあって、ビジターセンターとして地域環境を取り入れた活動をやっていくとすると、どんなことができるんだろうか、と模索しているうちに、今年1月に東京海洋大学の江戸前ＥＳＤ第1回ワークショップに参加して、これは参考になる企画だな、と思い、また、小山文大さん（表紙参照）と今年の春に出会いました。

日野　小山さんと私たちが行ったふるはまでの小学生対象の環境教育活動をご覧になって、どのような感想をお持ちでしょうか。

藤塚　館の活動のひとつの課題として、海辺・自然の活動を通して地域の学校とどうつながることができるのか、学校はどういうことを求めているんだろうか、ということがありました。小山さんや海洋大の学生の活動を見て、海は発見の面白さ、考える楽しさのチャンスを与えてくれる場所だと思いました。私も子どもの頃、海とか水とか好きだったけど、やっぱりいいなあと思いました。そして、私は黒子として、こういう活動の枠組みをつくっていけばいいんだ

な、と思っています。

日野　活動には市民団体も関わっていくのですか。

藤塚　浜辺では「大森ふるさとの浜辺を育てる会」(つくる会の発展）が、浜辺の維持活動を始めています。また、地元の町会長さんたちもＮＰＯ「大森　海苔のふるさと会」をつくりましたが、その理事の方たちには、元ノリ生産者や海苔問屋さんたちも含まれています。昔、ノリ生産に従事していた方たちは高齢化していて、何とか自分たちの文化を若い人たちに伝えていこうということで、ノリを育てて、海苔抄（す）き（大田では海苔付け）をすることも計画しています。

ＥＳＤで地域の人が自信を持って外とつながる

日野　江戸前ＥＳＤにもご参加いただいていますが、ご感想はいかがでしょうか。

藤塚　江戸前ＥＳＤのワークショップは、学生にしても、先生にしても、みんな同じ土壌で話をして、お互いの言っていることを共有していく形で進めているのがいいなあと思いました。それでワークショップの成果をまとめて、無駄にしない。

日野　それは、もったいないから、ですよ。

藤塚　参加してて、地域の中でワークショップを企画して、学生さんたちが入って一緒にやったらまた違う雰囲気のワークショップをやるんじゃないかなと感じました。

ＥＳＤそのものについて、まだ私はよくわかっていないと思う。でも、ふるはまを見ても、生き物－人－社会、みんなつながりながら動いてる。社会っていうのは、排他的な面も、吸収しようっていう面も、両方持っていると思う。そこをうまくつなげていくような活動ができればいいかな。地域の人たちは、地域の中だけでやりたいっていう思いが強いのかもしれない。だけど、同時に、できれば開いてつながっていきたいっていう思いもある。だから、自信をつけるための活動を模索しているわけですよ。海苔をつくってみよう、と動き出したりしている。

また、大田区は、都市ですが、行政の課題の一つとして観光をキーワードとして何か出来ないかということを今、考えています。その中で、私の課題のひとつは、伝統文化を現代に生かすということ、もうひとつは、環境を観光に生かすということです。

地域の力として潜在する伝統文化を地域の人びと自身が観光に活用すれば、自信を持って元気になるチャンスが増えるのではないでしょうか。失われた浜辺の環境を取り戻したことで、途切れていた自然－人－社会の環もつながり始めているように思います。その環の存在が潜在する伝統文化にエネルギーを与え、人々を元気にしていくように見えます。

ふるはま･海苔のふるさと館へ期待すること

日野　最後に、来年度のふるはまと海苔のふるさと館へ期待することを教えてください。

藤塚　新しい施設ができるので、みなさんが使ってくれるような施設になってくれればいいなと思っています。今年いろんな活動をしたり、海苔の展示を考えたりしたけれども、やっぱり開館して、それを利用する人たちとの中で育っていくものだと思うんです。みなさんが楽しみながら地域を見直したり、自分たちの環境、水でも空気でも、考えていけるような場になればいいんじゃないかなと思っています。

日野　今日はお忙しい中、どうもありがとうございました。

日野　佑里 さん
（ひの・ゆり）

東京海洋大学 海洋政策文化学科４年生。趣味は路上演奏活動(ストリートミュージシャン)

藤塚　悦司 さん
（ふじつか・えつじ）

大田区立郷土博物館　学芸員。近年は「麦わら細工」にはまっています。

江戸前ESD活動報告

2007年の「ふるはま」での活動をふりかえって

日野　佑里（東京海洋大学・海洋政策文化学科４年生）

“ふるはま”。いつの間にかこの言葉が私たちの間で定着し、皆愛情を込めて呼んでいます。私はそれを心から嬉しく思います。

私がこのふるはまに関わるようになったのは昨年2月。「環境教育で地域活性化」をテーマに卒業研究をしたいとゼミで発表した後、川辺先生が紹介してくださったのが、このふるはまでした。その後、ふるはまの見学をさせていただき、大田区の藤塚さんやＮＰＯ法人地域パートナーシップ支援センターの小山さん、大森東小学校・中富小学校の皆さん…と、沢山の方々に出会いお世話になりました。

卒業研究を始めた当初は、結論としてどこへ辿り着くのか自分でも分からず、途中、目の前のものをこなしていくことだけで精一杯の時期もありました。しかし、このふるはまに通い続けるうちに、なんとかしてみんなに愛される場所にしたい、この地域の人たちの様々な想いを実現したい、という気持ちが強くなっていったのです。それは、やはり実際に自分の目で見ること、自分がそこに参加すること、そして直接話を伺うこと…それらがこのふるはまへの、大森への、気持ちを大きくしていったのでしょう。

具体的に研究で何をしてきたかというと、関連する論文（環境教育、博物館教育など）のレビュー、ふるはまの環境と利用の実態調査(生物調査に同行・イベントへの参加・近隣の各小学校父兄への利用状況アンケート)、小学校の環境教育調査(環境教育サポート・先生へのインタビュー)、関係者へのインタビュー、江戸前ＥＳＤワークショップへの参加(提案・発表・ワークショップの成果まとめと考察)等です。私はこれから、これらを参考資料として、今後のふるはまの発展のために環境教育を含めた地域での活動を提案していきたいと考えています。そして、私はもうすぐ卒業をしてしまうけれど、これからもこのふるはまを見守っていきたい、できればこの研究の続きを誰かに託したい。そう願います。

次々と新しいことへ挑戦し、本当に勉強になりました。様々な立場の方と接し、一緒に活動していく中で喜びを感じました。1人ではできないことも、皆が歩み寄れば実現に近づくことを改めて知りました。

恵まれた環境で研究することができ、本当に幸せだったと思います。お世話になった皆様、ありがとうございました。研究が終わっても、これからもずっと何らかの形で関わっていけたらと思います。

ふるはまはまだスタートしたばかり。これからどうなっていくか、非常に楽しみです。（ひの・ゆり）

2007年６月18日に東京海洋大学で日野さんたち学生が企画して開いたワークショップ「大森ふるさとの浜辺公園で私たちになにができるか」の様子。　撮影：柳優香さん

2007年「ふるはま」にかかわる活動

4月　海洋大生有志が、大田区「大森ふるさとの浜辺公園」（以降、ふるはま）で小山文大さん（ＮＰＯ法人地域パートナーシップ支援センター）の環境学習活動に参加開始。

6月18日　海洋大生企画で、藤塚悦司さんをお招きして、**「大森ふるさとの浜辺公園で私たちに何ができるか」ワークショップ**を開催。

7月10日　海洋大にて**江戸前ＥＳＤ第1回協議会を**開催。

8月6日　藤塚さん、小山さん、村石健一さんと**「ふるはまワークショップ」**開催。具体的な活動計画について話し合いました。

9月5日　ワークショップ「ふるはまの9月以降の活動について」でさらに具体的な活動プログラムについて相談しました。

10月2日　相談と準備を重ね、いよいよ**第1回江戸前ESDカフェ**（おもしろ理科教室）を大森東小学校で開催しました。

今回は、堀本奈穂さん（江戸前ESD瓦版第2号参照）を講師に、6年生を対象に、ふるはまで海水を採り、その中に棲むプランクトンを顕微鏡で見ました。（2～3頁参照）

10月12日　**ワークショップ「海苔の資料館（通称のりかん）の来年度の活動計画」**で、2008年度に江戸前ESDの活動でのりかんを活用させてもらう計画をたてました。

11月2日　**ワークショップ「のりかんの来年度の活動計画」**では、10月に引き続き、来年度の活動を相談しました。

江戸前ＥＳＤ活動報告

ふるはまでの魚類調査と環境意識調査からの発見

小林　麻理（東京海洋大学・海洋政策文化学科４年生）

最初に大森ふるさとの浜辺公園(以下、ふるはま)を訪れたのは、大学4年生になって間もない4月でした。ふるはまは丁度その月の１日に開園したばかりで、芝生は疎ら、木には葉がなく、公園と呼ぶにはまだまだ殺風景ではありましたが、浅瀬には魚が群れ、浜辺にはズボンの裾を捲り上げて遊ぶ親子の姿がありました。その微笑ましい光景を目にし、この１年卒業研究の調査地として関わっていくんだという期待が膨らんだのを覚えています。

私はこの1年間、ふるはまの魚類調査と環境教育効果の考察をテーマとして研究を行ってきました。ふるはまを調査地に決めた理由は、近隣に複数の学校や団地が存在し、人が集う場として好立地であるにも関わらず、開園して間もない為、環境調査以外の先行研究がなされていなかったためです。ふるはまがどのように変化し活用されていくのかにとても興味があり、それを調べることで社会的に意義のある草分け的な研究が出来ると思いました。

5月から7月にかけ、月1回の計7回、投網を用いた魚類採集を行いました。また10月には、江戸前ＥＳＤの出張授業としてふるはまで小学生を対象に行われた学習の後、子供たちの環境意識がどのように変容したかをアンケートにより調査し、その2ヵ月後の12月、学びの広がりを調べるアンケート調査を再び実施しました。

ふるはまで魚類調査の網を引く筆者（左）

調査を通じて、魚が毎月成長していくのがハッキリと分かり、まるで我が子の成長を見守るような気持ちになりました。調査中話しかけてきてくれる地域の方々や、活動を通して関わった先生方からは、ふるはまを使った活動への期待が伝わってきました。子供たちの意識調査からも、環境意識や自然科学への興味の芽生えを発見できました。

緑も増え、来年からは海苔のふるさと館も開館し、未完成感の残る４月と比べ確実に進化を遂げているふるはま。今後子供からお年寄りまで、様々な年齢層の人々に、環境教育の場として、コミュニケーションの場として、活用されていくことを願います。（こばやし　まり）

編集後記

前号で予告しましたように、今回は「大森ふるさとの浜辺公園」、通称「ふるはま」特集です。

2007 年 2 月に藤塚さんにご案内いただき、初めてふるはまの渚を歩いてから１年、江戸前ＥＳＤでは、ふるはまで何ができるかをテーマにワークショップを重ねました。その間にも、日野佑里さんと小林麻理さんは、小山さんのふるはまでの環境教育活動のお手伝いをしながら、卒業論文研究をおこないました。

小山さんは「出会い」について書かれていますが、江戸前ＥＳＤがふるはまでの活動をすんなりと始めることができたのは、小山さん、藤塚さんとの出会いがあったからです。藤塚さんには、海苔のふるさと館開館準備に超多忙のなか、お時間を割いてじっくりとお話しいただきました。ありがとうございました。

今回は、辰巳さん、日野さん、小林さんが年末にがんばって報告を書いてくれました。

辰巳さんは、社会人入学で海洋政策文化学科３年次在学、江戸前ＥＳＤ発足当初から事務局スタッフとして江戸前ＥＳＤ全般を支えて下さっています。今回は南極調査航海中の堀本さんに代わり、第１回江戸前ＥＳＤカフェ報告をして下さいました。(川辺)

発行　江戸前ESD瓦版編集委員会
〒108-8477　東京都港区港南4-5-7
東京海洋大学　海洋科学部　江戸前ESD事務局内
電話/FAX　03-5463-0574　（川辺研究室）
電子メール　edomae@kaiyodai.ac.jp